

平成 16 年 5 月 24 日 記者会見 内容

発表内容：社長交代について

日 時：平成 16 年 5 月 24 日（月）16 時 00 分～16 時 30 分

場 所：奈良県政記者クラブ

発表者：奈良銀行 社長 野村 正雄、副社長 上林 義則

【野村】

奈良銀行社長の野村でございます。皆様方お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。来る 6 月 22 日の当社の株主総会をもって、トップの交代をいたしたいと考えておりますのでご報告いたします。後任は副社長の上林でございます。交代の理由について若干お話をしたいと思っております。私は昭和 53 年 12 月に 35 歳で社長に就任をして以来 26 年が経過いたしました。その間に、奈良地域に密着した基盤確立を図る、あるいは近年の金融環境の激変に応えるべく努力をしてまいりました。最近では、りそなグループの傘下に参入するなど、重要な経営戦略を打ち出すとともに、グループ力を活かした営業展開を行ってきたところでございます。前期においては企業価値拡大を図るため、リストラや不良債権処理の断行により、喫緊の課題である財務体質の改善に目処をつけることができたと考えております。当社は平成 15 年 9 月期に大幅な赤字決算をいたしました。同年 10 月、平成 16 年 3 月期以降の業績の V 字回復に向けて「経営改善計画」を策定しました。この経営改善計画を達成し、更なる改革を加速させ、奈良地域における当社の確固たる存在感を確立するためには、「変革の視線」をもつ新たな若いリーダーのもと新体制を組んで臨むのが良いと考えた次第であります。以上のような理由から、私は上林副社長にバトンタッチすると決断したわけです。

【上林】

只今ご紹介いただきました上林でございます。簡単に私の略歴をご紹介させていただきますと、昭和 30 年の大阪生まれでございます。53 年に大和銀行に入社し、その後の勤務地としましては大阪で勤務してまいりました。今年 4 月から奈良銀行の副社長としてまいっておりますが、奈良県で仕事をするのは、この 4 月以降が初めてでございます。そういった意味で、奈良県の歴史、地域、地域経済等についてまだまだ勉強しないといけないと考えておりましたところ、次の社長にとご指名をいただき、非常に大任とは思いますがもお引き受けをさせていただいたという次第であります。先ほど野村社長のお話にもございましたが、野村社長は私が銀行に入った当時から奈良銀行のトップとしてこの奈良県の地域経済、奈良銀行の発展に貢献されてこられました。永きに渡り、また金融環境が変化する中で、ご努力をされてきたことに対し、この場を借りて敬意を表したいと思っております。その野村社長を引き継いで、今回私が次の社長として就任するということですが、勉強不足な点、また野村社長のような大先輩の後を引き継ぐという点につきまして、私個人としましては身の引き締まる思いをしているというのが実情でございます。今後、私の力不足のところは、野村社長が鍛え上げられた社員の皆さんの力を借りながら、野村社長がつくられてきた奈良銀行を、より県民の皆さん、お客様に愛される、また信頼される銀行にして

いくというのが私のミッションであると考えています。銀行というのは、お客様の大切なお金を扱うということで、銀行に対する信頼がないと商売ができません。ここ数年の金融環境の激変で、銀行に対する信頼感は損なわれたというのが実情ではないかと思えます。

野村社長の築かれた地域のお客様、あるいはお取引先との信頼を、より深いものにしていくというのが第一の仕事になるかと考えております。ここ数年来不良債権処理、あるいは将来のリスクファクターを排除するという観点から、野村社長が行われた財務改革をベースに、今年度以降V字回復を果し、収益力を高めていくということが私の使命だと思っております。収益力を上げないとお客様が安心してお付き合いしていただける銀行にはならないでしょうし、信頼も得られないだろうと考えております。

2つ目として奈良銀行というのは、奈良県の中で商売をさせていただいている訳ですから、奈良県の中で奈良銀行を選んでいただける、奈良銀行と取引がしたいと思っていただけるよう、奈良銀行の強みをより伸ばしていく、そういったものをつくっていくとこういうことをやっていきたいと考えています。

最後に、地域に貢献するあるいは地域の皆さんと一緒に考えるといったことが今後必要になってくようかと思えます。リレーションシップバンキングの考え方にもありますように、地域の皆さんとともに育っていく金融サービス業を目指していきたいと考えています。

以下は、奈良県政記者クラブにおける記者の皆様との質疑応答です。

Q . 南都銀行が非常に強い基盤ですが、V字回復するための収益力のアップについて、もう少し具体的に教えてください。

A . (上林副社長) ここ数年来奈良銀行は、財務体質の改善に取り組んできています。これをベースに銀行の収益を上げていくことは十分に可能だと思います。昨年の経営改善計画以来、住宅ローンや保証協会融資において、奈良銀行として過去にないような伸びを示すという実績も上がってきています。野村社長が築かれた、こういったものをもっと少しブラッシュアップするということで達成可能かと思えます。

Q . 個人ローンや企業向け融資の具体的な数字は？

A . (上林副社長) 住宅ローンにつきましては、年間で50億円程度伸びておりますし、保証協会の貸し出しにつきましては伸び率でもトップになっています。昨年度実行した保証の残高でも相当上位に食い込めるようになってきています。企業向け融資につきましては、中小企業向け融資はプラスですが、一般企業向けはマイナスとなっています。これは不良債権処理として約50億円の部分直接償却を行ったためであり、これを勘案すれば、健闘しているといえるのではないかと。中小企業向け貸し出しにつきましては、9月比約40億円程度伸びています。

Q . 不良債権処理は峠を越えたのですか？

A .(野村社長) 峠は越えたと思います。不良債権比率も前期は6 . 6 %程度まで下がりました。

(上林副社長) リソナグループの方針ということで、不良債権処理については邦銀の中でも厳しい基準を採用して手当てを進めてきました。奈良銀行につきましても同じ基準に基づいて進めてきておりますので、同業態の中でも処理は進んでいると私は考えています。

Q . 退任のご感想は？

A .(野村社長) まだあと1ヶ月程がんばらなくてはなりませんので、実感としてはわいてこないのですが、重荷をやっと下ろせるという感じでございます。

Q . 野村家がずっとやってこられたわけですが、新しい社長を迎えられるということでのようにお感じですか？

A .(野村社長) 父親が創業し、その後何も考えないで継いで、がむしゃらにがんばったというのが私の実態なんです。昨今の金融情勢などを観察すると、金融機関というのは公的で重要なインフラですので、個人的な色彩を帯びているよりも、私どもはクローズな体制であったわけではありませんけど、もっと開かれた組織体で、誰から見ても透明性が確保できる体制が望ましいであろうと考えております。

Q . 奈良銀行の強みはどのようなところと考えていますか？

A .(上林副社長) 地域に根ざしているというのが強みだと考えています。地域に根ざしているというのをどのような形でより良い金融サービスに繋げていけるか、ということが重要だと思います。

Q . 退任後の奈良銀行での役職は？

A .(野村社長) ありません。今後は、奈良銀行のファン、協力者でありたいと思っています。

以上